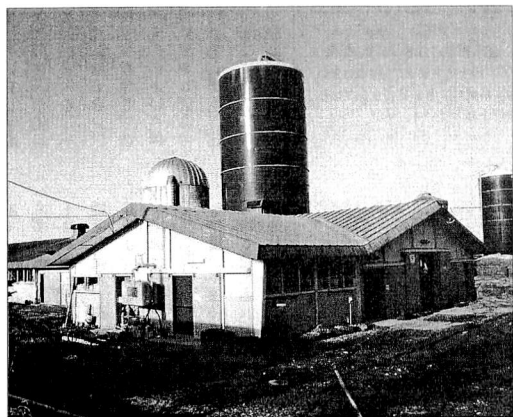


# 負債や離農の苦悩抱えて 模索するガツト後の酪農

ルポライター  
滝川 康治



「急激な生産拡大に伴う先行投資が生んだ多額の負債を抱える北海道酪農。6年後の乳製品の市場開放が低乳価時代を招き寄せ、離農に拍車をかける事態だつてありうる。いったい、この先どうなるのか——酪農王国・別海町で関係者に聞く。」



新酪農村の施設—維持費がかさむので、気密サイロを使う農家は半数以下という

## 営農指導にも新酪の影

ゆるい傾斜地に草地が広がり、大きな気密サイロがそびえる別海町の新酪農村(通称「新酪」)。ここは、農用地開発公社が未墾地を切り開いて草地を造成(73〜83年度)し、周辺農家の入植などによってモデル的な酪農を確立するという名目で、国家的事業の実験台にもされ続けてきた。

同町上風連の斉藤常吉さん(66・別海農協副組合長)は、たたき上げの酪

農家だ。牛を世話して少年時代を過ごし、25歳のときに分家・独立して、53年には酪農専業になった。新酪農村の先発組として75年に現在地へ入っているから、2度の入植経験をもつ。いまは62haの土地で120頭ほどの乳牛を飼う。斉藤さんを紹介してくれた友人が「卓越した経営観の持ち主」と評していたように、新酪農村のなかでも傑出した経営者である。

別海農協は昨年、経営不振の農家50戸ほどを対象に、役員が手分け

して営農指導を強化してきた。負債の金利軽減などの措置を講じつつ、1カ月ごとに経営収支をチェックするもので、安易な新規貸付には応じない方針。3年間を目安にしたテコ入れ策だという。斉藤さんも9戸を担当し、何度も農家を訪れて話し合ってきた。「(資金を)借りることの大変さを体験してもらい、農協への依存意識を変えていかなければ、と思う」

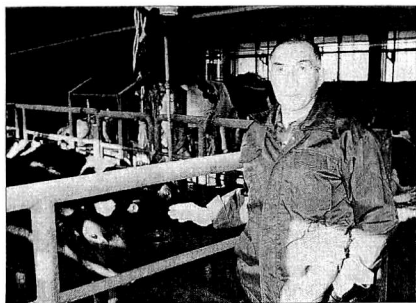
と自助努力を求める斉藤さん。対象者の半数ほどは新酪の農家で占めてお

責任を取るように求めている。

新酪のシンボルの気密サイロは、半数以上が遊休施設と化している。飼料の取り出し装置は電気代がかさみ、使える経営環境にないからだ。使わなくても年間20万円近い固定資産税がかかる。机上で設計した牛舎の使い勝手はあまり良くない……などと、現場から積み上げた技術体系とは言いがたい。わたしの目的は、業者と役人の都合を優先した補助事業の実験台にされた施設群、と映る。

## 負債の実態と経営不安

別海町内には昨年未現在で1050



経営不振農家の対応に奔走することも多い斉藤さん



新酪農事業の看板—基盤整備は進んだが、多額の負債が残った

戸の牛乳生産農家が暮らす。乳牛の飼育頭数は10万頭以上、牛乳生産量は年間約40万トンと、ずっと「酪農日本」の座を誇っている。54年の「酪農振興法」制定に始まって、パイロットファーム事業や新酪農村の建設と、農政主導で「ゴールなき拡大」の道を行ってきた。この40年で所得格差も拡がり、1億円もの貯金を保有する農家がある一方で、生活が窮乏した農家もある——といった具合に、ひとつの物差しでは計れない状況が生まれている。

町内4農協のうち、正組合員数が373人と最も多い別海農協(丹羽忠文

組合長)の場合、負債の元利すべてを返済しても剰余金が出る余裕の酪農家(A層)が半数を占める。その半面、C層(利子の全額と元金の一部が返せない農家)とD層(元利とも返せず、家計費も出てこない農家)が4分の1ほどいる——というのが、酪農経営が直面する現実である。組合員の平均負債残高は約3700万円、ゼロから1億円を超える人までいる。7000万円台の層がひとつの塊としてあるらしい。昨年の1戸当たり販売実績は平均負債残高とほぼ同額だから、ちよつとつまづく経営が悪化してしまう。「不振の要因には、新酪のように投資のタイミングが時代背景とかみ合っていないかった例や、経営手腕や技術面の問題、経営をトータルに見ないで悪化した——などが挙げられる。今後、さまざまな対策を講じて、20〜30戸の農家は乗り切れるかどうか、難しいところでしょう」

「現状より悪化しないよう対応しているが、それも現行の保証乳価(75円75銭/kg)の水準があつてのこと。乳価が60円台前半になったら、とてもついでいけない。今後5年間はウルグアイ・ラウンド合意で見通しが立つだろうが、2001年以降は数年前の牛肉自由化の状況が再来するかもしれない。大きな不安を抱えている」

同農協の高崎好盛営農相談課長は、先行きの不透明さに表情をくもらせる。「やめるなら今のうち」とばかり、経営の良好な人が見切りをつけるケースも現れているらしい。

「現状では負債の大小で所得格差が出ている。地元農協や行政だけでは負債対策は難しく、国にもリスクを負ってほしい。50代の組合員には後継者がいない人も多く、将来は経営を継続できない。農水省は、やる気のある農家を育てよ」と言うが、そう簡単なものじゃない。ゆとりある職業という将来展望に立つた施策でない、後継者が進んでやれる環境は生まれない」

丹羽組合長は、こう言うて語気を強めた。ここ数年、町内の酪農家戸数は20数戸ずつ減っているだけに、危機感が募っているようだ。

同町出身で酪農学園大講師(農政・農村社会学)の吉野宣彦さんは、「今が正念場で、関係者の腕の見せど



町内では最大規模の別海農協の事務所

んできた酪農を廃業にした経験もある  
ので、酪農は当事者にとって、暗いイ  
メージのものとは限らないことを肌で  
知っている。が、これからの酪農現象  
は国際競争にはじき出される色彩が濃  
くなり、従来のものとは性格がかなり  
違ってくるだろう。乳製品の市場開放  
や乳価の低下、後継者不足などを想定  
すると、ゆるやかなカーブを描いてい  
る酪農者数が一転する可能性も否定で  
きない。

そんな事態を関係者はどう捉え、ど  
んな対策を講じようとするのだろうか。

「今後は、現状で十分やれる人、現状  
で中規模経営、拡大型の経営の3つに



草地資源を活用した根室酪農  
を説く別海農協の丹羽組合長

ころ。経営内容の悪い人たちの自覚を  
促すために、関係機関が高収益の事例  
を提供して、経営を好転させていく出  
口を示す——それが一番役に立つので  
はないか。そうした支援体制を創るこ  
とが大事だと思う」

と、経営不振農家に対する支援策を  
提言する。こうした声を受けて、農協  
側も動き始めている。

### 乳価が60円台の予測も

一心不乱にひた走ってきた別海酪農  
もここ数年、「規模拡大はもう限界。立  
ち止まって考えよう」という認識が深  
まってきたようだ。輸入飼料に依存し  
た酪農を見直すことで、経営好転につ

なげる農家も増えている。

が、生計を支える乳価の見通しと  
なると、ずいぶん厳しいものがある。

政府は、93年暮れのウルグアイ・ラ  
ウンド農業合意で乳製品の関税化受け  
入れを決めており、2001年以降は  
市場が開放される。その結果、国産乳  
製品の需要縮小や保証乳価の低下など  
が予想され、加工用原料乳のウエート  
が高い北海道酪農を直撃することが避  
けられない。

国の「新農政プラン」は21世紀初頭  
の北海道酪農のモデルを示して、経産牛  
80頭、生乳の生産費50円/kg」と試算  
しているが、この生産費は現在に比べ  
て約26%もの引き下げとなる。こうし  
た数字をもとに、保証乳価は25%程度  
は低下する」と推測した北大の研究者  
もいる。つまり、わずか10年以内に、  
酪農家は60円/kgにも満たない保証乳  
価しか手にできなくなる——との推論  
だ。そんな事態になれば、地域全体に  
深刻な影響を与えてしまう。

前出の吉野さんは、乳価が30%下が  
った場合の経済性を試算したが、経産  
牛50頭以上の大規模農家が所得の減少  
率が著しい——という結果になった。

分化するんじゃないか。拡大型農家の  
労力不足をカバーする形で、リタイア  
した人が農作業のコントラクター（請  
負）やヘルパーなどに参加してもらう  
ことも、これからの道でしょう。」

「草地資源を活用して牛乳を搾る方が  
農家の所得が上がる事例を示しながら  
指導していくことが大切だと思う。ま  
だまだ酪農は成長産業であり、今後は  
飲用乳のシェアが上昇していくはず。  
根室管内に飲用乳工場を建設するため  
の検討作業も始まっている」

丹羽組合長は、周辺産業を創りだす  
努力によって、過疎化を食い止める方  
策を模索していた。

別海町は昨年、経済部のなかに「酪  
農対策室」を新設し、負債対策や糞尿  
問題などに取り組んでいる。道庁から  
出向中の吉川孝志室長は、

「乳価が低下した場合の生産費がどう  
なるのか、見極めがつかない。」「ここま  
で地域が頑張ってくれ」という指針を、  
国がきちんと示すべきだ。それがない  
から農家が不安になる」

と、国が将来展望の基本を提示する  
よう注文をつける。  
「この5年間が勝負。今世紀最大の酪

「仮に乳価が60円台になると、赤字に  
転落する農家は2〜3割に達するだろ  
う。このままの状態を放置すれば、乳  
価が下がるとかなりの酪農家が生活で  
きない水準に落ち込んでしまう。負債  
の多い人はやめざるを得ず、組合員と  
その保証人、農協が共倒れになる可能  
性も出てくる。」(吉野さん)

と、厳しい見通しを述べる。大きな  
国際競争の荒波にさらされるだけに  
経営の足腰を強めながら、北海道酪農  
の存在意義を消費者にアピールする作  
業が急務なのだろう。

### 模索する若手リーダー

同町奥行の塩田浩典さん(35)は、  
農協理事も務める若手リーダーのひと  
りである。

訓子府町の農家に育ち、実習生活を  
へて80年に新酪の一角にある塩田牧場  
に迎え入れられた。2世代夫婦で乳牛  
約160頭を飼っており、昨年は69  
0kgの牛乳を出荷している。乳量は多  
いが負債もどつきりある。償還金も年  
間約1000万円になるとかで、「償還  
圧が高く、生活費と経費を差し引くと  
そんなに残らない」と話す。

農改革を大胆にやりたい」

と語気を強める佐野力三町長は、飲  
用乳の売り込みや「根室ブランド」の  
牛肉生産、農村の環境改善などに意欲  
を見せる。新規就農希望者の研修施設  
づくりの構想も練っている。

「町内の規模拡大は限界なので、新規  
参入者が現れない限り農地を活用でき  
ない。負債対策をしても継続できない  
人、後継者に意欲のない人は選手交代  
してもいいと思う。年間10戸台は新規  
参入を確保したい。(研修施設は)ぶら  
つと訪れて、宿泊しながら地域の人た  
ちと交流する起点となるものを、3カ  
所くらい造りたい。近隣の町でより高  
度な施設の計画もあるので、そこも  
連携していく。」(佐野町長)

関係者の意見を聞いて計画をまとめ、  
来年度にも着手する予定という。

話からは、乳製品の市場開放後の展  
望を鮮明にしない農政にいら立ちなが  
らも、地域の活力を維持しようとする  
心意気が伝わってくる。これまでに蓄  
積した底力もある。ただ、消費者に対  
するアピールの手法は手さぐりのよう  
だし、規模拡大→法人化→コントラク  
ターの導入という道がそれほど雇用の

昨年購入飼料を減らしたので乳量  
が前年比60%ほど少なくなったが、収  
支はそう変わらなかった。立ち止まっ  
て、経営内容を点検してみたからだ  
という。が、そんな工夫も急激に乳価が  
下がるとどうなるのか……。

「円高が進んで、本州では生きている  
牛を輸入し始めた。これからは北海道  
の牛の個体販売が難しくなる可能性も  
ある。アンケート結果では、50代で後  
継者のいない農家が300戸もあった  
し、最悪の場合は今の半分の戸数にな  
るかもしれない。炭鉱の町と同じよう  
になるんじゃないか……」

そんなことを考えると気が重くなる  
が、塩田さんに暗さはない。

「地道に頑張っていれば酪農動向はな  
いからね。酪農する連中は運転手や土  
方をやると言うけど、農家ならではの  
楽しみもあるはず。酪農跡地が流動化  
しない事態を想定すると、徹底した放  
牧型の酪農で、自然のなかで搾った牛  
乳を消費者にPRするしかないんじゃないか」と、新たな展開を模索する。

### 酪農対策に知恵を絞る

わたしには、戦後開拓者の両親が営

吸収できるのか——といった点が気  
なるところだった。

北海道酪農は、EU並みの経営規模  
とアメリカに迫る個体乳量の高さに達  
している、という。が、ここ20年ほど  
で生産量は急上昇したものの、先行投  
資による負債の増大と過重な労働を招  
き、なかなかゆとりのある生活を手に  
できないでいる。酪農家が努力するほ  
ど乳価が下がる。どこまで仕事をさせ  
るんだ。もういいぞ! という気持ち  
だよ——前出の斉藤さんがふと漏ら  
した言葉が、多くの農家の本音だろう。  
消費者は、こうした現実をあまりに知  
らない。口にする牛乳・乳製品の流れ  
に考えをめぐらせたことが、どれほど  
あるのだろうか……。

酪農の衰退は、農村の過疎化や児童  
数の減少、周辺産業や商店などの流出  
などと、広い分野に影響を及ぼす。農  
政サイドは生活と再生産ができる価格  
政策と適切な負債対策を示す。自治体  
は住民とともに10年後を見すえた地域  
づくりプランを練りあげる——それが  
急務な時代を迎えている。(おわり)  
※次号からは「北海道環境リポート」  
を連載します。ご期待下さい。